

に擴けてゐる多頭蛇の笠石が、一定の間隔をおいて立つてゐる。而して建物の壯重な全景は、忽ちに復されたのである。今日では之をドラポルト氏の圖で見るとのみではなく、直接寫眞について、其の彫刻を施した步廊の全長も、其の金字形の姿の高さに互つても、之を眼前に展べて見得るのである。

今若し、アンコール・トムの北方に向へば、こゝにも他の驚異を見る。城壁は延長十二キロメートルを下らない方形をなし、厚い牆壁で形られて、之に廣い壕を巡らし、之に五門を開いてある。四方各一門、それに東面で半ば北寄りに一つ多くなつてゐる。之等の宏壯な門には、四個の大きい顔面を表はした塔が立つてゐるが、頗る舊態を有してゐる。然しながら、各門の前方で壕に架けた橋にあつた奇異な欄干は跡が残つてゐないが、之は片膝を地に坐つてゐる巨人五十四人が、巨大な多頭蛇を腕に抱いてゐる様に出來てゐたのである。然し、勝利門といふ東北門の欄干は、全部殆んど舊狀に復せられ、西門では、一層完全に、此の人目を惹く裝飾の復舊が出来る事をも已に聞いてゐる。